

Title	R . M . フォックス著 ジム・ラーキン ; エムリス・ヒューズ著 ケア・ハーディ
Sub Title	R. M. Fox; Jim Larkin, The rise of the underman ; Emrys Hughes; Keir Hardie
Author	飯田, 鼎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1960
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.53, No.4 (1960. 4) ,p.400(94)- 406(100)
JaLC DOI	10.14991/001.19600401-0094
Abstract	
Notes	書評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600401-0094">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19600401-0094</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評

R・M・フォックス著

『ジム・ラーキン』

(R. M. Fox; Jim Larkin, The Rise of the Underman, 1957)

エムリス・ヒューズ著

『ケーア・ハーディ』

(Emrys Hughes; Keir Hardie, 1956)

ここに紹介を試みる二冊の伝記書は、十九世紀末期から今世紀初頭にかけてのイギリス労働運動に、偉大な足跡をのこした二人の指導者の生涯をとりあつたものである。ケーア・ハーディの名は、あまりにも有名である。独立労働党の創立者、イギリス労働党の「育ての親」であるばかりでなく、その社会主義者としての誠実にして献身的な生涯、敬虔にして求道的な生活態度、熱烈な平和主義者として、彼の名は今日もなお世界中の多くの人々から尊敬と親しみとをこめて呼ばれているし、またイギリスにおいて、ハーディの伝記があとを絶たないのは、彼が民衆のなかに生きつづけていることを物語っている。たとえば、このヒューズのハーディ伝と前後して、ジョン・コックバーンのハーディにかんする小説的伝記「飢え

相異なる思想と信条のもとに活躍した二人の指導者の伝記を同時に論評しようと想いつたのは、主として以上のような理由にもとづく。

ケーア・ハーディは、一八五六年八月十五日スコットランドのグラスゴウから十二哩ばかりはなれたラナークシアの寒村レグブランノック (Legbrannock) に、母とともに農場の手伝い女をしていたメリー・ケーアの子として、極貧のなかに生まれた。父なる人は、彼を自分の子として認知することを拒んだため、私生児となった。やがて彼の母がグラスゴウから来た舟大工ディヴィット・ハーディと結婚し、一家はグラスゴウに移った。貧しかったので、八才のときに商店の使い走りとなって働き、あるいは造船所で鋸を熱したりするという単調な生活がつづいた。やがて一家はグラスゴウから再びラナークシアに帰り、ニューウオートヒルという炭坑の町に定住し、ハーディは、坑道の通気掛となった。こうして彼の炭坑労働者としての生活がはじまったのである。二三才のときまでラナークシアの炭坑で働いたが、少年時代における悲惨な生活、はげしい肉体的労働、この苦しい想い出は、後年、彼をして絶えず貧しい人々、虐げられた人々にたいする同情へと駆りたてたものであった。

一方、ジム・ラーキン(正しくはジェームズ・ラーキン; 筆者)は、一八七六年、貧しいアイルランド人労働者の子としてリヴァプールの貧民窟に生まれた。五才になるまでアイルランドの母の実家で育てられたが、このアイルランドでの幼年時代とそれにつづくり

たる心」(John Cookburn; The Hungry Heart, A Romantic Biography of James Keir Hardie, 1956) が出ている。

「英国社会主義運動の父」ともいふべきハーディのこの輝かしい声望に比べて、同じ時代に活躍し、ハーディに劣らぬほどの業績をのこしながら、ジム・ラーキンの名はともすれば忘れられようとしている。ハーディは、十九世紀初頭以来、全国的な職業別組合として長い闘争の歴史を誇ってきた炭坑労働者組合を背景に、政治の舞台に登場し、労働党の大立物となったのに反し、ラーキンは被圧迫民族としてのアイルランド人、とくに不熟練労働者の利益を代表し、一九〇七年のベルファーストの運輸労働者の大ストライキ以来、ジェームズ・コノリー (James Connolly) とともにアイルランド労働者階級の革命的な運動を世界に知らしめ、とりわけアメリカの I. W. W. の理論にもとづく産業別労働組合主義を鼓吹した。ハーディが、もっとも強大な勢力と古い歴史をもつ熟練労働者の組合としてのスコットランド炭坑労働者連盟をその背景としてもっていたのに反し、ラーキンのひきいていた大衆は、英本国の熟練労働者からほとんど顧みられなかった低賃金労働者——不熟練労働者——であった。もしもケーア・ハーディの名が、イギリス社会主義と労働運動にとつて、きり離すことができないとすれば、ジム・ラーキンは、被圧迫民族としてのアイルランドの低賃金労働者の組織者として、左翼的革命的理論を代表し、アイルランド労働運動に画期的な役割を果したという点でまさに対照的な存在であった。筆者がここに、

ヴァアールでの生活は、彼の将来に決定的な影響をあたえたようである。「若いジムは、農場についての子供らしい想い出とともに、老人が、アイルランドの害悪、フィニアンおよび飢餓の時代について、はげしい調子で語るのをきいた。これこそ彼が成人した累閉気であった。リヴァプールのこれらのみずぼらしい街の背後には、アイルランドの小さな農場や石の多い原野があった。成長期の想像力に富む少年にとっては、これらの影響は、非常に多くのことを意味していた (Fox; pp. 13-14)。アイルランド人労働者の貧困の原因については、ブルジョア階級による搾取に加えて英本国人による民族的圧迫と宗教的偏見が、これを一層ひどいものにしていているという認識、これは同じく貧困のなかに成長しながらも、ケーア・ハーディにとつてはまったく無縁のものであった。

ハーディは、はげしい労働生活に明け暮れながらも、農民詩人口バート・バーンズ (Robert Burns) を愛誦し、またトーマス・カーライルの「衣裳哲学」やヘンリー・ジョージの「進歩と貧困」を読むことによつて、社会主義へ近づいていった。ハーディには希望があった。当時ラナークシアにおける炭坑労働者運動の指導者で自由党の議員であったアレキサンダー・マクドナルドを中心とする組合に加入し、二三才で書記となり、坑夫の劣悪な労働条件の改善や賃金切り下げ反対の運動をおこなった。やがてエシアにうつり、その坑夫組合の書記となり、はげしい生活苦や資本家の圧迫と闘いながら、ついにスコットランド炭坑夫連盟を結成するのに成功し

た。  
 ハーディは、地下労働者のための機関紙「ザ・マイナー」を発売し、そこで酒類販売の抑止および土地の国有化を主張し、それを実現するための手段として、教育の無料、上院の廃止、議員の有給などを高く掲げると同時に、鉱山取締命令 (Mines Regulation Bill) および雇主責任法 (Employer's Liability Bill) などの通過に努力したのであった。しかし当時の炭坑労働組合運動の指導者の多くは、自由黨員としてブルジョア的イデオロギーに浸透され、たとえばトーマス・バート (Thomas But) の如きは労働時間短縮の問題——八時間労働制——について、法的に規制されるよりは、組合の交渉によって決定されるべきであるという見解を支持していた。ケーア・ハーディの古い指導者にたいする闘いは、いわゆる自由労働派 (Lib-Labs)——A・マクドナルド、T・バート、ブラッドロー (Charles Bradlaugh)——ヘンリー・ブロードハースト (Henry Broadhurst) 等の労働組合総評議会 (Trades Union Congress) を中心とするグループ——にたいする一連のはげしい攻撃となつてあらわれた。「労働者の代表を議会におくり出すこと、」この運動は一方において旧指導者層とのヘゲモニーの争奪のための闘い、従つてそれが根強く結びついている自由党の権威にたいする挑戦を意味すると同時に、また労働者政党の樹立を目指すものでなければならなかった。かくして一八八八年八月二十六日、スコットランド労働党が生まれた (Hughes; p. 47)。

ダブリンにおける画期的な大ストライキとなつて発展したのは、イギリス全体の労働運動をも震撼したいわゆる「産業上の大不安」という背景もさることながら、アイルランドにおける極端な低賃金、劣悪な労働条件、これに加えるに専制的な資本家の態度であった。「わたくしはいま開かれてある政府の調査委員会によって、このダブリンにおいて支払われている男子の平均賃金を引用するならば、週七〇時間労働にたいして十四シリング、婦人の平均賃金は、労働時間が決められていないで、大体五〇時間から九〇時間の間を上下するのであるが、週十一シリング以下である。一大家族平均五人の二一、〇〇〇世帯が、一間しかない家に住んでいる。道徳的な法律とは何か？五人——父、母、三人の子供、すべての者が悪臭を放つきたない部屋にむらがっているのだ。あらゆる生活のいとなみ——誕生から死に至るまでの——が、そこでおこなわれなければならないのだ。資本家階級とその友人たち、支配階級はこの街に存在する嘆かわしい状態にかんして、まったく無感覚である。市当局の役人の多くの人々は、貧民住宅の所有者か粗悪な食物製造者、収税吏および労働者を酷使する雇主なのだ。警察の多いことではヨーロッパ最高である。三〇万人余りの人口のうち三万人が、要求される法外な家賃を支払うことができないために、毎年追ひ出されるのだ。」(Fox; p. 69)  
 ラーキンが描写している一九一三年のアイルランドの首都ダブリンの街の状態は、チャーチストが活躍していた一八五六年と何等本

一方ラーキンが労働運動の指導者としてその姿をあらわすに至つたのは、一九〇七年、アイルランドの状態が非常に悪く、失業者は増大し、貧困と飢えとが労働者階級の生活を破滅させようとしたがら、しかも彼らはこれにたいして闘うすべをほとんど知らなかった時であった。「彼は、貧困に苦しんでいる不熟練労働者の大衆を前にして、何人も彼らを追い出す権利のないことを語った。彼はつきのように云った。労働者は、あらゆるものを変革する力をもっている。しかしそのためには彼らは団結しなければならぬ——波止場労働者も運搬夫もあらゆる職種の筋肉労働者がみな」(Fox; p. 26)。  
 ラーキンは、未組織の不熟練労働者の間に、ゼネラル・ストライキの思想をふきこみ、また同情ストライキの戦術を教えた。その結果、アイルランド労働運動史上有名なベルファーストの運輸労働者の争議となつたのである。ラーキンの協力者コノリーは、一八九六年のアイルランド社会主義共和党の創立と同時に、戦闘的な社会主義の宣伝をアイルランドではじめ、一九〇三年から一九一〇年に至るまで、アメリカ合衆国に滞在して、そこで世界産業労働者連盟 (I. W. W.) や産業別組合主義の影響をうけた。ラーキンやコノリーが、深刻な影響をうけた I. W. W. の鼓吹する「一大組合」の理想は、ひとりアイルランドのみならず、イングランドにおいても、うけいられ、たとえば第一次世界大戦の直前のギルド社会主義の運動となつてあらわれていた。しかしその戦闘的な労働組合主義が、とりわけアイルランドにおいて深く浸透した結果、一九一三年の

質的にかわつていかなかったのではないか。  
 ベルファーストの運輸・石炭・ドック労働者の運動は、カトリックとプロテスタントとの宗教的派閥などに悩みながらも、ラーキンの努力によって統一的な運動として発展し、ラーキン主義は、一九一三年の「大不安」の頃にはアイルランド労働運動の牙城となつていた。  
 ラーキンが、産業別組合主義の理念にもとづき無知と貧困の泥沼に沈淪しつつあったアイルランドの不熟練労働者を組織し、もつとも戦闘的革命的な左翼労働組合たらしめようと苦闘していた一九〇七年から一九一三年の時代、ケーア・ハーディはどのような活躍をしたであろうか。ラーキンよりも二〇才の年長であったハーディは、一九〇六年すでに五〇才であり、二九名の代表者を議会におくつた労働党の長老として、また議会労働党の議長として重きをなしていた。彼はすでにボア戦争にたいするはげしい抗議にみられる反軍国主義・平和主義の主張を貫き、自由党の帝国主義者ホルデン (Mr. B. Haldane) の軍事的構想——ドイツ陸軍に対抗する国民軍の建設——に反対することによって (Hughes; p. 135)、フェビア主義者や H. M. ハインドマンおよびジョン・バインズをしてブラッチフォードなどの好戦主義者と訣別しつつあった。また労働党が取りあげ彼自身もつとも関心をいだいた問題として、炭坑夫の八時間制、老齢年金制、失業問題および婦人参政権などがあつた。またハーディ個人の問題としては、インド、アフリカ、オーストラ

リアおよびニュージールランドをして中国へ旅行がころみられたことである。彼が海外旅行から帰ってきた直後の一九〇八年、独立労働党 (I. L. P.) を労働党からきりはなし、労働党の統一を破壊しようとする公式主義者、グレイソン (Victor Grayson) やブランチフォードおよびハインドマン等のハーディ等にたいする攻撃がはげしくなるとともに、ヨーロッパ戦争の危険性が次第に大きくなった (Hughes: pp. 174-176)。この頃のハーディは、もはや炭坑労働組合の指導者であるよりは、労働党の最高首脳のひとつであった。ハーディは労働党の建設と、これを通じて各社会主義団体との統一に専心しつつあったが、彼が、ラーキンおよびラーキン主義について知らされたのは、一九一三年、ダブリンにおいてようやくはげしくなった運輸労働組合の闘争のときであった。

すでに一九一一年、ラーキンとコノリーとの指導によって結成されたアイルランド運輸労働組合 (The Irish Transport Union) が次第にその勢いを増すとともに、雇主側の不熟練労働者の組合にたいする圧迫も露骨となった。しかし I. W. W. の理論によって鍛えられたコノリーおよびラーキンは、不熟練労働者を含む「巨大組合」をとらえ、その第一段階として、同情ストライキの戦術をとる。その結果、荷車の御者、波止場労働者、その他のあらゆる運輸労働者が運輸労働組合と争議に入っているすべての会社の所有する貨物をあつかうことを拒否した。ダブリンにおける争議の規模が拡大するにつれて、労働者階級の状態に憤りと恥辱を感じていた作

家、大学教授、知識人などがラーキンに味方する一方、資本家側は警察と結び、あるいは反動的な勢力を頼んで組合運動をおしつぶそうとしたため、ダブリンは闘争の巷と化した (Fox: pp. 74-78)。

一九一三年八月二六日、ダブリンの市内電車従業員が一斉にストライキに入り、資本家マーフィー (W. M. Murphy) は警察の援護のもとに威嚇的な手段に訴え、従業員にたいしラーキンの組合から脱退する旨の誓約書を強要した。官憲による暴行とたたかいながら大衆によびかけたラーキンは、ついに他の指導者とともに、煽動を理由に逮捕された。イングランドでは想像もつかないようなはげしい弾圧と血みどろの闘い、これにたいしてイギリス労働党および労働組合評議会ほどのような態度を示したか。この点はきわめて興味深い問題である。ヒューズの本には、ラーキンのことについて、まったくふれていない。だがスチュワートの「ハーディ伝」によれば、彼はその闘争がすでに激化していた一九一三年九月のはじめ、アイルランド運輸労働組合の招きでダブリンに行き、これにかなり関心を示したようである。「ハーディは、英国生まれの煽動家が、アイルランド問題に介入することが、いかに危険であるかを知っていたが、それにもかかわらず、彼が労働組合運動を破壊しようとする陰謀として描いたところのものにたいする抵抗に参加することが、英国労働組合の義務であると宣言した」。

英国の組合指導者が、非常なおどろきをもってラーキンの闘争を注視していたにしても、本国の労働者を同情ストライキにひき

れようとしたラーキンの必死の努力が、労働組合総評議会指導者や労働党指導者——ケーア・ハーディも含めて——の日和見主義によって空しく失敗に終わったことは事実である。一九一三年から一四年にかけて、労働者は、雇主側の条件をうけいれて職場に復帰し、ラーキンは叛逆罪を理由として逮捕された。ラーキンによって指導されたダブリンのこの大ストライキによって、運輸労働組合は粉砕されたかのようであった。しかしまったく滅亡したのではなく、第一次大戦中にその勢力を非常に拡大し、アイルランドの一大組合となった。

一九一四年十月、ラーキンは故郷アイルランドを去ってアメリカに向った。彼は主としてニューヨークおよびシカゴで活躍し、ユージン・デブス (Eugene Debs) に指導された社会主義労働党や I. W. W. と密接な関係を持ち、とりわけロシア革命の勃発とそのアメリカ労働運動への波及により、社会主義労働党が分裂した結果、最左翼として活動していた彼は、ロシア革命のアメリカにおける実践者として投獄されたこともあった。

ケーア・ハーディとジム・ラーキン、この二人の指導者の生涯とその闘争のあとを説く者は、両者がともに指導者として偉大な資質をもっていたことを認めざるをえないであろう。しかしそれにもかかわらず、この両者にはやはり、英本国の熟練労働者とアイルランドの不熟練労働者の差異を感じないわけにはゆかない。ハーディの生涯、いふまでもなくそれは、労働党の成立と発展のための携ま

る努力と献身の連続であり、婦人および児童労働者、失業者、寡婦などの社会的弱者のための奮闘の生涯であった。しかしそのハーディですら、アイルランドの不熟練労働者やアフリカおよびインドなどの植民地住民にたいして偏見がなかったわけではない (Hughes: pp. 146-150)。

筆者はいまこの二冊の伝記を読み終って、一八四〇年代のあの「チャーチストの時代」に活躍した二人の偉大な指導者ウィリアム・ラヴェットとフィアガス・オコンナーを想い浮かべている。ハーディがラヴェットとどのような類似点をもっていたかは別として、ラーキンはたしかにオコンナーを生んだアイルランドにのみ育つことができた人物ではなかつたらうか。

ラーキンは、アメリカから故郷アイルランドに帰ったのち、たいまつ行列の先頭に立っているのを見た著者フォックスは、当時を追想してつぎのように書いている。「人々は、英国におけるあの巨大なチャーチスト運動の物語りを想いおこした。たいまつ、の光に照らされて、オコンナーが演説をしている真夜中の集会を。そのとき、彼らがそう呼ばれていたように、カファスチャン織りの短い上衣をきた人々」は、イングランドの中部地方や北部工業地帯に集まり、彼らの選ばれた指導者の熱烈な雄弁に耳を傾けたのだ。ラーキンは、オコンナーのように、その聴衆の感情を波立たせ、その灰色の生活のなかに、劇をもちこむことができた」と (Fox: p. 180)。

- (1) G. D. H. コール「英国労働運動史」邦訳(Ⅲ)二二九頁(岩波現代叢書)。
- (2) 拙著「イギリス労働運動の生成」二五五頁。
- (3) ハーディは日本にも立ちより、幸徳秋水、片山潜、西川光二郎等と会見し、神田錦輝館で演説を試みた(吉川守陽著「荆逆星霜史——日本社会主義運動側面史——」一四九—一五〇頁)。
- (4) William Stewart; J. Keir Hardie, A Biography, 1921, pp. 332~333.

——一九六〇・二・二五——  
(飯田 鼎)

ラーヤ・ドウナイエフスカヤ  
『マルクス主義と自由』

……一七七六年から今日まで』

Raya Dunayevskaya;

Marxism and Freedom

……from 1776 until today

(一)

自由という言葉は抽象的に理解しようとするとき、われわれは一体いかなる意味の自由について語っているのか、殆んど整理のつか

ことは明らかであると思われるが、それに対して、社会主義国であるソ連においては、完全な意味での自由があるかといえば、右の成熟した西欧的個人主義的自由論の目からみれば否定的な答えが予想される。この著作は、自由に関するこの分裂した二つの視点の間に生れたものであって、著者の態度は基本的にヘーゲル・マルクス・レーニンの線に沿って出発しながらスターリン以降のソ連を自由の抑圧者、国家資本主義ときめつけて容認せず、だがアメリカ資本主義に対しても終始マルクス・レーニン主義者としての批判の手をゆるめてはいない。

このようにみてくると明らかのように、著者の立場は特定の国、または政党を支持していないという意味で抽象的であり、哲学的であり、更にいえば、著者はマルクス・レーニンとスターリン以後とを切り離すことによって自己の正統を主張する亡命者のマルクス主義の一人である。このような立場は著者ドウナイエフスカヤ女史の経歴による所が多いようにみうけられる。トロツキーの秘書であった彼女は第二次大戦に際し、ソ連は労働者の国であるから防衛されるべきだ、と主張するトロツキーに対して、それが、国家資本主義国であるという主張の故に彼と袂別したのである。しばしば著者はトロツキーを官僚主義者として非難するにもかかわらず、トロツキーの永久革命論の影響は彼女の上に覆うべくもなく著しい。好んでレーニンの世界革命を期待する言葉を引用するものそのあらわれであると思われる(たとえば二〇四頁及び二四二頁)。

書 評

ない困惑の中に立っているのがつく。だがこのような概念的な規定から離れて、一体われわれは現在自由であるのかないのか、という風の問題をおきかえてみると、われわれはかなり明確に現代における自由の問題の意味を知ることができる。つまり、現代には異なった「自由」を主張する二つの世界が存在するのであって、われわれは好むと好まざるとにかかわらずこの二つの自由の谷間におかれていますのである。いうまでもなくその一つは自我の主張、個性の發揮などの、いわゆる市民的自由を至上の内容として主張する西欧的な自由論の系譜であり、他は必然性の洞察の中に自由をみ、あらゆる自由を社会發展の法則性との関連においてのみ考えるヘーゲル・マルクス・エンゲルスの自由論の系譜である。だが今やこれら二つの自由論は互いに無関係に切り離された対立物ではなく、互いに他を考慮することなしには存立しえないほど深い関係をもつに至っている。西欧的自由論は、その主張する自由が成立するための経済的条件に対して無関心ではありえなくなっているし(多元的国家観から階級的國家観へ發展の姿勢をみせざるをえなかったラスキをみよ)、また、資本主義的搾取機構の打倒をめざすいかなるマルクス主義者も、近代社会がもたらした市民的自由の諸内容を無視する訳にはいかなないのである。ここに自由に関する論争の現実的根拠があるのであって、自由の問題は単なる概念の問題ではなく、具体的な社会の問題なのである。われわれが住んでいる資本主義社会が、われわれに対して抽象的な、言葉の上だけの自由しか与えていない

この著作が、「マルクス主義と自由」という標題をつけられたゆえんは、著者が、マルクス主義を根本的にその哲学においてとらえ、マルクス主義の歴史を自由への闘争の歴史として理解し、さらに詳細にいえば、人間の自由を「労働の疎外」からの解放として把握しているからにはかならない。したがって、一世紀をこえるマルクス主義の歴史は、人間を労働疎外から解放するための闘争の歴史として考えられている。このようなマルクス主義の哲学的理解は、この著作の長所とともに短所を形成している。すなわち疎外論を、マルクスの「経済学・哲学手稿」における「労働の疎外」を中心として理解し、疎外を所有や、抽象的な人間疎外においてみないで、直接に生産の場で考察したために、それによって著者はマルクスの、哲学から経済学への道の理解に接近することができた。「著者は、しかしながら、単に「労働の疎外」についてのべているだけで「手稿」にいう四つの疎外、労働生産物、労働、人間、の疎外について詳しい考慮をしていない。第三章五三(一六六頁)このような疎外の理解はマルクスの「手稿」から「資本論」への發展過程の理解に一つの光りを投げかけているが、他方、著者は「労働の疎外」という哲学的概念が、マルクスの経済学の中に發展的に解消されるとはみないで、マルクス以後のあらゆる労働階級運動の前面におかれるべきヒューマニズム・哲学であるべきだと考えるとき、それはこの著作の重大な欠陥となつてあらわれる。

すなわち、具体的な生産関係の中で労働をみないで、抽象的、哲